国語〔基礎評価型〕

設問			解答例
①	問一	1	4
		2	1
		3	1
		4	3
		5	5
		6	4
	問二	7	3
		8	1
		9	6
		10	4
		11	5
	問三	12	2
		13	4
		14	5
		15	2
		16	5
	問四	17	4
		18	3
		19	1
	問五	20	5
	問六	21	4
	問七	22	4
	問八	23	1
②	問一	1	4
	問二	2	1
		3	2
		4	2
		5	1
		6	3
		7	5
		8	1
	問三	9	3
	問四	10	2
		11	3
		12	1
		13	2
		14	5
		15	4
	問五	16	4
	問六	17	2
	問七	18	3
	問八	19	1
	問九	20	5
	問十	21	4
	問十一	22	1

国語〔総合評価型〕

設問			解答例
①	問一	1	4
		2	1
		3	5
		4	2
		5	3
		6	1
	問二	7	2
		8	1
		9	3
		10	4
	問三	11	3
		12	5
		13	4
	問四	14	2
		15	4
	問五	16	4
	問六	17	5
	問七	18	3
	問八	19	2
②	問一	1	7
		2	5
		3	2
	問二	4	3
		5	2
		6	3
	問三	7	2
		8	3
		9	4
		10	1
	問四	11	2
		12	3
		13	3
		14	3
	問五	15	3
		16	1
		17	4
	問六	18	3
	問七	19	5
	問八	20	3
	問九	21	1
	問十	22	4
	問十一	23	3
	問十二	24	5
		25	2

国語〔基礎評価型〕

国語①

問五　傍線部の内容を問う問題。傍線部の次の段落で、「被災者でない者は被災者の立場を完全に共有することなどできないという事実を冷静に見つめるところから、本当の想像力が作動する」とあり、この「本当の想像力」が「言葉本来の意味における想像力」を指している。よって、選択肢⑤が正解。①は「自分自身にも起こりうる可能性があることを意識し」が、②は「自分自身の場合に置き換えて当事者として考え」や「感情移入して」が、③は「絶対に共感できないと思考停止するのではなく」や「共感できるかを考え続ける」が、④は「自分自身も同様に感じることができるように」が不適当である。

問六　傍線部の内容を問う問題。傍線部の三段落後に、「教授」と「学生との間には知識や経験において圧倒的な落差があること」が述べられている。さらに、その次の段落の引用文で「教育の体制が自然に価値観の強制を生み出していることの可能性」があり、「知識とその使用法に関する体系を伝達する過程の中に、価値観がしのび込んでいる」という「むずかしい問題が含まれている」ことが説明されている。よって、この内容を述べた選択肢④が正解。①は、「教育の内容」を「教官」が「決定することができない」としている点が、②は「学生よりも無知な教官に教わる可能性」が、③は「対話を媒介として多種多様な見方を発見する機会に欠けている」が、⑤は「教官は何も対応できない」が、それぞれ誤り。

問七　脱文補充問題。空欄の前の引用文の最後の一文で、「それは、知識とその使用法に関する体系を伝達する過程の中に、価値観がしのび込んでいる、ということです」と述べられている。この内容は、空欄の後で「吉川総長」が「大学紛争とは……根源的には、価値自由な学問の伝承という本来の教育へのカイキを目標としていた」と「結論づけ」ている内容の集約といえる。よって、これらの内容に合致する選択肢④が正解。①は「社会全体で学生たちの思いや発言に耳を傾け、彼らが将来を歩んでいけるよう全力で支援することが大切」が誤り。②は「当時の教育において教官の側が決める領域は少なく」が、③は「特に目新しいものではありません」が、引用文の内容に肯定的な空欄の後の本文の内容と合致しない。⑤は「社会に対する不信」が誤り。

問八　脱文補充問題。空欄の直後に、「これはまさに、暗黙のうちに特定の価値観を押しつけること」と述べられている。つまり、空欄には「特定の価値観」の「押しつけ」になるような「アクティブ・ラーニング」の特徴が入ると推測できる。よって、「高く評価され」ることと「否定的に評価される」ことを示し、「特定の価値観」に導こうとしている内容の、選択肢①が正解。②は「新たな技術や教育方法の習得が必要となる可能性」は、「特定の価値観」の「押しつけ」につながるとは限らないので誤り。③は「興味のない学生には無意味な授業となってしまう可能性」が、④は「授業時間を大きく超過してしまう可能性」が、⑤は「設備が不足している場合は、実施が困難になる可能性」が誤り。

国語②

問五　傍線部の内容を問う問題。傍線部の前で「承明門院」が「かくれさせ給ひぬ（お亡くなりになった）」と述べられているので、「ことわりの御年」は「（承明門院がお亡くなりになるのも）不思議でないご年齢」という意味になる。よって、選択肢④が正解。

問六　登場人物の心情の読み取りを問う問題。傍線部の前で、「顕定の大納言、大将のぞみ給ひしを、院もさりぬべく仰せられければ、除目の夜、殿の中のものどもも心づかひして侍るを、心もとなく思ひあへるに、ひきたがへて、先に聞えつる公基の大臣にぞおはせしやらん、なり給へりしかば（顕定の大納言が、大将になりたいとお望みだったのを、上皇もそれがよかろうとおっしゃったので、除目の夜、お屋敷の人々もその心づもりでいて、待ち遠しく思っていたところ、予想とは違って、前にお話しした公基の大臣でいらっしゃっただろうか、その方が、大将になられたので）」と言っている。よって、選択肢②が正解。

問七　傍線部の内容の読み取りを問う問題。傍線部の前に、「頭おろしてこの高野にこもりゐ給へるを（出家してこの高野山にこもっておられたのを）」とあるので、傍線部には大将になれずに失意した顕定が出家したことについての心情が述べられている。また、本文の最後に「そのよし奏すれば」とあり、「奏す（奏上する）」という敬語が使われるのは天皇・上皇・法皇のため、「いとほしくあへなしと思され」て「かの室をたづねさせ給ひて、御対面あるべく仰せられ遣はしたる（顕定の僧房をお訪ねになって、御対面しようと仰せ遣わした）」のは、上皇である後嵯峨院だとわかる。「いとほし」は「気の毒だ、かわいそうである」、「あへなし」は「どうしようもない、仕方ない」という意味なので、選択肢③が正解。①は「公基が」と「かわいがっていたのに期待外れなことだ」が、②は「公基のことを、愛しく残念なことよと」が、④は全体が、⑤は「顕定が、自身のことを、悲しくも」が誤り。

問八　本文の内容の読み取りを問う問題。傍線部は、「（顕定は）今更（私＝後嵯峨院に）会うまいというようだ」という意味である。また、傍線部の前で「跡もなくしなして、いと清げに、白き砂子ばかりを、ことさらに散らしたりと見えて（跡形もなくすっかり片づけて、大層さっぱりと、白い砂だけをわざわざまき散らしたと見えて）」とある。顕定が「院もさりぬべく仰せられければ（後嵯峨院も顕定が大将になるのがよいだろうと仰せになっていたので）」、期待を募らせていたことをふまえると、選択肢①が正解。②は「後嵯峨院は怒りを感じ、今後は決して顕定に会うことはないと」が誤り。③は「自身を恥じており後嵯峨院に合わせる顔がないのだと心情を想像している」が、傍線部の後の「いとからい心かな（大層厳しい顕定の心情だなあ）」と合わない。④は「公基と仲直りをすることも二度と会うつもりもない」が誤り。⑤は「顕定が桂の山荘に引っ越す」ことは、後嵯峨院は事前に知らないので不適当。また、「使いにやった公基が」以下の部分は本文にない内容なので誤り。

問十　文学史の知識を問う問題。『増鏡』が成立したのは一三六八年～一三七六頃で、一一八〇年の後鳥羽天皇の生誕から一三三三年の後醍醐天皇の隠岐からの帰還までの歴史がつづられている。④『とはずがたり』が成立したのは一三〇六～一三一三年頃で、後深草院に仕えた女性の日記文学であり、十三世紀の宮廷の様子が描かれているので、選択肢④が正解。①『栄花物語』が成立したのは一〇二八年頃で、十世紀～十一世紀頃の藤原道長の栄華がつづられている。②『方丈記』が成立したのは一二一二年で、十二世紀に起きた地震や飢饉などについてふれつつ、人生や世間の無常がつづられている。③雨月物語が刊行されたのは一七七六年で、中国や日本の古典を題材とした九編の怪異小説がまとめられている。⑤『土佐日記』が成立したのは九三五年頃で、紀貫之が任国の土佐から京に帰るまでの出来事をつづった日記文学である。

問十一　文学史の知識を問う問題。②『今鏡』が成立したのは一一七〇年で、『大鏡』に続く書として、一〇二五年から一一七〇年までの歴史がつづられている。③『吾妻鏡』が成立したのは一三六八年であり、一一八〇年の源頼政の挙兵から一二六六年の将軍・宗尊親王の帰京までの歴史がつづられている。④『大鏡』が成立したのは一一一五年頃で、十世紀～十一世紀頃の藤原道長の政治的な策略などが、批判的につづられている。⑤『水鏡』が成立したのは一一九五年で、『大鏡』につづられている以前の時代を扱った歴史物語である。よって、一一八〇年から一三三三年の歴史がつづられている『増鏡』に、もっとも新しい時代が描かれているため、選択肢①が正解。

国語〔総合評価型〕

国語①

問五　空所の前後の文脈を読み取る問題。「『X性』から『Y性』を見る」視点は「別々の存在がまずあって、それからつながりを見る視点」であり、「わたしたちの普通の物の見方である」と述べられているので、「X性」は「センテン的にものがバラバラに存在しているというものの見方」である「分別性」であり、「Y性」はもの同士の「つながり」を見る「真実性」のことである。また、「『Z性』から『Y性』を見る視点」は「ブーバーが問題にした〈われ―なんじ〉の視点」、すなわち「『対応語』の視点」なので、「Z性」は「依他性」である。よって、選択肢③が正解。

問六　傍線部の前後の文脈を読み取る問題。傍線部の「人間が語る根源語の二重性」とは〈われ―なんじ〉の〈われ〉と、〈われ―それ〉の〈われ〉が異なること、すなわち「〈われ〉が二つあるということ」であり、これについて傍線部の前で、「〈われ〉が二つあるということは、〈われ〉が生きる世界が二つあるということである」という筆者の見解が述べられている。よって、選択肢⑤が正解。①・②・③・④はいずれも本文に書かれていない内容なので誤り。

問七　傍線部の前後の文脈を読み取る問題。傍線部の「このことば」とは「根源語とは、単独語ではなく、対応語である」というブーバーのことばであり、それは仏教の「唯識」の思想における「依他性」というものの見方と対応することが述べられている。よって、この内容をまとめた選択肢③が正解。①は「自分と他者は本来一体のものである」という視点は「依他性」ではなく「真実性」の見方なので誤り。②は「人間が命を受ける背景には想像できないほどの歴史が存在する」が、④・⑤は全体が、それぞれ本文に書かれていないので誤り。

問八　本文の要旨を問う問題。①は「この世の中の出来事は全て、因と縁によって起こ」ると考える「依他性」の説明と合致する。②は「わたしたちがありのままでいることが一番大切だ」が「諸行無常・諸法無我」の教えと合致しない。「諸行無常」とは「すべての現象は変化し続けており、永遠に不変なものは存在しない」という教えであり、「諸法無我」とは「すべてのものは因縁によって生じたものであって実体がない。独立して成立するものはないので『我』は存在しない」という教えである。つまり、固定された「ありのまま」の自分は存在しないということが示されていることになる。③は仏教の「唯識」の思想が「『無明』と言われる私たちの心の闇のしくみをタイケイ的に明らかにした」と述べられていることと合致する。④は「分別性」を「常識として生きているのがわたしたちである」と述べられていることと合致する。⑤は「龍樹菩薩」が「縁起」を「『空』ということばで表現し、実体的に物を見る見方の誤りを明確にした」と述べられていること、また、「『空』を『実体としてあるのではないが、現象としてはある』と言い換えるとよくわかる」と述べられていることと合致する。⑥は「根源語とは単独語である」というものの見方、すなわち「分別性」が「日常的であまりにも当然のごとくになっているため、無意識にそのような発想で物を見、考えて、それを常識として生きているのがわたしたちである」と述べられていることと合致する。「明らかな誤りを含むもの」を選ぶので、選択肢②が正解。

国語②

問三　動詞の活用と敬語の知識を問う問題。(1)「詣で」は下二段活用動詞であり、意志の助動詞「ん」に接続していることから未然形である。また、「詣づ」は「参詣する」という意味の謙譲語であり、ここでは「壬生寺」への敬意を示す。(2)「奉る」は四段活用動詞であり、断定の助動詞「なり」に接続していることから連体形である。また、「奉る」はここでは直前の動詞「頼み」に謙譲の意を添える補助動詞であり、「病人」が「御辺（＝『一人の男』）」を「頼む」場面であることから、「一人の男」への敬意を示す。(3)「給は」は四段活用動詞「給ふ」の未然形であり、直前の動詞「あやまち」に尊敬の意を添える補助動詞である。「あやまち給はで極楽浄土に引導せさせ給へ」は「病人」が「地蔵菩薩」に祈願している内容なので、「あやまち給はで」は「地蔵菩薩」の行為である。よって、「給は」は「地蔵菩薩」への敬意を示す。(4)「侍り」はラ行変格活用動詞であり、過去の助動詞「けり」に接続していることから連用形である。また、「侍り」は丁寧語の補助動詞であり、ここでは作者から読者への敬意を示す。(5)「まゐらせ」はサ行下二段活用動詞「まゐらす」の未然形または連用形で、ここでは未然形接続の助動詞に接続していないことから連用形となる。「まゐらす」は「献上する」という意味の謙譲語であり、ここでは「香花」を「地蔵菩薩」にお供えするという意味になる。よって、「地蔵菩薩」への敬意を示す。(6)「申し」は四段活用動詞「申す」の連用形であり、「言ふ」の謙譲語である。ここでは「一人の男」が「病人」に対して「しかじかのこと侍りてなん」と伝える場面なので、「病人」に対する敬意を示す。以上より、下二段活用動詞は二つ、連用形は三つ、謙譲語は四つ、「一人の男」に対する敬意を示すものは一つであるので、それぞれ選択肢②・③・④・①が正解。

問九　傍線部の理由を問う問題。傍線部の前で、「一人の男」は「地蔵菩薩の御告げ」を聞いて「同行の男（＝病人）」に「臨終」が迫っていることを知ったが、「病人」が「先に見しにかはることなし（＝先刻見た様子と変わりがない）」という状態だったため、「思はずげ（＝意外な様子）」であったのである。よって、選択肢①が正解。

問十　傍線部の内容を問う問題。傍線部のあとで、「病人」が「さてはわが年ごろの願望成就して菩薩の接引し給ふにこそ（＝それでは私の長年の願望が成就して菩薩様が私を極楽浄土にお導きなさるのだ）」と述べているので、「しかじかのこと」とは「（病人の）引導に行くぞ」という「地蔵菩薩の御告げ」であることがわかる。よって、選択肢④が正解。

問十二　文学史の知識を問う問題。(1)①『風姿花伝』と②『申楽談儀』は世阿弥の著書であり、世阿弥とともに能を大成した③「観阿弥」は世阿弥の父である。よって、傍線部①・②・③はいずれも正しい。また、世阿弥と観阿弥が活躍したのは室町時代であるので、壬生狂言の成立は能の大成よりも早いことになる。よって、傍線部④も正しい。傍線部⑤については、一般に、狂言は素面で演じることを基本とし、神や鬼などの特別な役のみ仮面を装着するので、「すべての演者が仮面を着けて演じる」のは、壬生狂言と一般的な狂言とで異なる点である。よって、傍線部⑤は誤り。「誤っているもの」を選ぶので、選択肢⑤が正解。

(2)①の「阿仏尼」は『十六夜日記』を著した鎌倉時代中期～後期の歌人である。②の『山崎宗鑑』は『犬筑波集』の撰者であり、室町時代後期の俳人である。③の「兼好法師」は『徒然草』を著した鎌倉時代後期～南北朝時代の随筆家である。④の「藤原定家」は『新古今和歌集』の撰者の一人であり、鎌倉時代前期の歌人である。⑤の「源実朝」は鎌倉幕府第三代将軍であり、『金槐和歌集』を残した歌人である。「世阿弥」は室町時代前期に活躍した人物であるので、選択肢②が正解。